

スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラ [主語接辞-*wa*] について

古本 真

1. はじめに

本稿ではスワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラ¹ [主語接辞-*wa*] について論じる²。マクンドゥチ方言のコピュラ文には単に主語と補語を並置したもの (1a)、とコピュラとして [主語接辞-*wa*] という形式の要素 (以下 *wa* コピュラ) が二つの名詞句の間に現れるもの (1b)、がある³。

- (1) a. *mie* *mwanafuzi*
 1SG student
 b. *mie* *nyi-wa* *mwanafuzi*
 1SG 1SG.SM-be student
 「私は学生だ」

wa コピュラの-*wa* という形態素は動詞語幹として分析できるものである。Chum (1963: 66) は-*wa* には ‘be, become’、*wa* コピュラに対しては ‘I am, you are, he is’ といった訳を付している⁴。また先行研究では以下のような *wa* コピュラの現れる例を確認することができる。

¹ 本稿で単独で「コピュラ」という用語を用いた場合は、それ自体は何か具体的な意味を持たず、主語と補語という 2 つの項の関係を表し、述語として機能する要素を指す。またコピュラ文は主語と補語という 2 つの項の関係を表す文であると考える。

² 本稿で用いるデータは明示しない限り、マクンドゥチ郡在住の 50 代男性 (A 氏)、マクンドゥチ郡在住の 40 代女性 (B 氏)、マクンドゥチ郡出身で現在ザンジバル都市部在住の 50 代男性 (C 氏) から得られたものである。

³ 威信方言には主語と補語の間に現れる *ni* というコピュラが存在する。マクンドゥチ方言の話者もこのコピュラ *ni* を使うことはあるが、Whiteley (1959: 68) も指摘する通りそれほど一般的ではない。本稿ではこの *ni* については論考の対象としない。

⁴ 本稿ではこの-*wa* という形態素には英語の ‘be’ をグロスとしてあてる。それ以外のコピュラの機能を果たすものには COP というグロスをあてる。

- (2) *miye*⁵ *m-na-tenda* *kazi* *ino* *nyi-wa* *mkongwe*⁶
 1SG NMLZ-IMPF-do work this.G9 1SG.SM-be old person
 「この仕事をする私は老いぼれです」 (Whiteley 1959: 64)

- (3) *ka-wa* *mnyonge* *ha-gomo* *ku-nunua* *nyama*
 3SG.SM-be poor person 3SG.SM.NEG-be able.PRF INF-buy meat
 「彼は貧しく、肉を買うことができない」 (Racine-Issa 2002: 112)

以上のような記述からは、*wa* コピュラは単純に主語と補語をつなぐコピュラとして機能しているようにみえる。しかしながら、後述する通り、コピュラ文の中にはこの *wa* コピュラを使用できないものがあるが、そのことはこれまで指摘されていない。また *-wa* が動詞語幹であるならば、*wa* コピュラがどのような動詞の活用形と考えることができるのか、そしてなぜ *wa* コピュラには ‘become’ の意味が反映されていないのかといった点について先行研究では十分に考察されていない。本稿の目的はこれまで特にふれられてこなかったこうした *wa* コピュラの特徴を記述、分析することにある。

本稿ではまず2節でマクンドゥチ方言について概観する。続く3節で英語や日本語でなされているコピュラ文の意味構造に基づく分析を用いたり、補語の特徴に着目することで *wa* コピュラがどのような場合に用いることができるのかを明らかにする。4節では *wa* コピュラがどのような動詞の活用形と分析できるのかを示した上で、その活用形と *wa* コピュラの示す時間性の間にギャップがあることを示す。5節では *wa* コピュラのコピュラとしての用法が文法化の結果、二次的に発達したものである可能性について論じる。

2. マクンドゥチ方言について

2.1. 社会言語学的概要

先行研究に従えばマクンドゥチ方言の話者はタンザニア連合共和国ザンジバル・ウングウジャ島の南部地域に分布しているとされる (Whiteley 1959: 43, Nurse & Hinnebusch 1993: 11)。ただし話者自身がマクンドゥチ方言の話者の分布地域として認識しているのは下の地図上の *Makunduchi* と斜体で書かれている地域のみである。

⁵ 筆者が直接得たデータでは1人称単数の代名詞は *mie* という形式であり、わたり音は確認されていない。

⁶ (2), (3) の表記は本稿の表記法に合わせて変更した。またグロスも筆者が独自に付したものである。

2012 年タンザニア国勢調査⁷によればマクンドゥチ郡⁸の人口は 11,742 人であるが、ザンジバル都市部をはじめとする他地域にも相当数⁹のマクンドゥチ郡出身者が暮らしており、話者数の正確な把握は難しい。マクンドゥチ方言はスワヒリ語の方言分類では南部諸方言に分類される (Nurse 1982: 168)。教育や行政手続きなど公的な場では威信方言が使われることが多く、マクンドゥチ方言話者の多くは威信方言を理解するが、威信方言話者にとってはマクンドゥチ方言の理解は難しいようである。マクンドゥチ方言はしばしばカエ方言 (*Kikae*) とよばれる。

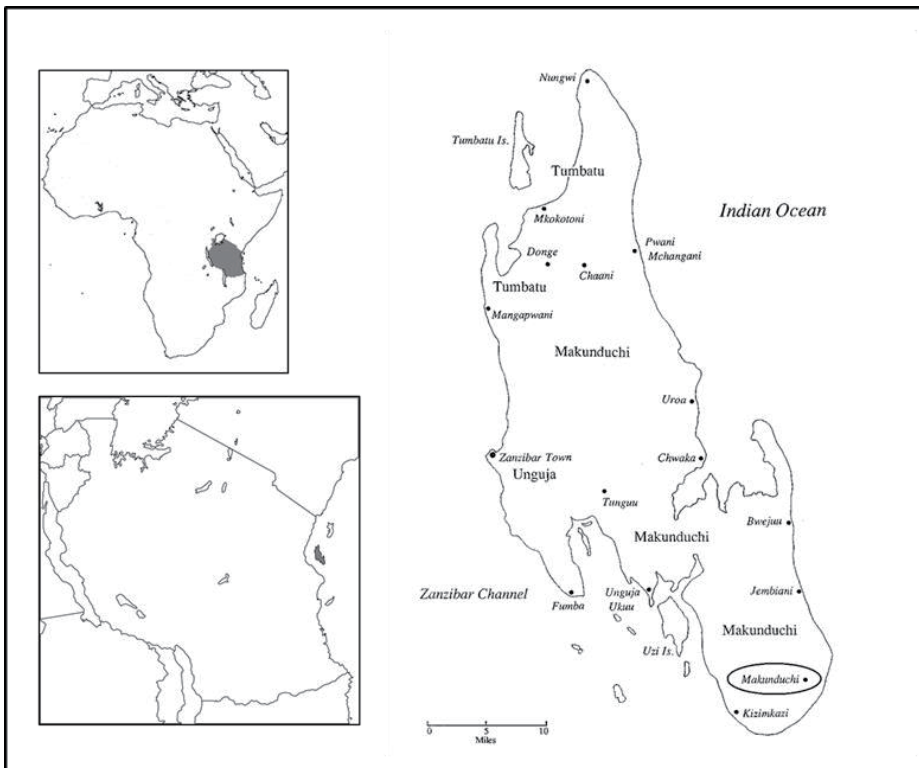


図 マクンドゥチ郡の位置¹⁰

⁷ <http://www.nbs.go.tz/> 参照。

⁸ 統計にマクンドゥチ郡単体の人口は掲載されていない。ここに挙げる数字はマクンドゥチ郡を構成する 6 地域 (Nganani, Kijini, Mzuri, Kajengwa, Kiongoni, Tasani) の人口の合計である。

⁹ マクンドゥチ郡の役場に勤める筆者の調査協力者によれば、都市部におよそ 10,000 人程度、マクンドゥチ郡出身者が暮らしているとのことである。

¹⁰ Nurse & Hinnebusch (1993: 52) より抜粋の上一部修正。

2.2. 文法概要

2.2.1. 音素と表記¹¹

母音音素は/i, ε, a, ɔ, u/の5母音が認められ、表記はそれぞれi, e, a, o, uで対応する。

子音音素は無気破裂音/p, t, k/, 無気破擦音/ɸ/, 有気破裂音/p^h, t^h, k^h/, 有気破擦音/ɸ^h/, 入破音/b, d, f, g/, 前鼻音化阻害音/^mb, ⁿd, (ⁿz), ⁿdʒ, ⁿg/, 摩擦音/ɸ, β, θ, ð, s, z, ʃ, ʒ, h/, 鼻音/m, n, ɲ, ŋ/, 流音/l, r/, 接近音/j, w/からなる。表記は/ɸ/=ch, /p^h=p', /t^h=t', /k^h=k', /ɸ^h=ch', /b/=b, /d/=d, /f/=j, /g/=g, /^mb/=mb, /ⁿd/=nd, /ⁿdʒ/=nj, /ⁿg/=ng, /ɸ/=f, /β/=v, /θ/=th, /ð/=dh, /ʃ/=sh, /ʒ/=gh, /ɲ/=ny, /ŋ/=ng', /j/=y としてそれ以外は音素表記と同じである。

音節構造はV, CV, C₁C₂V (C₂は接近音), Nが認められる。鼻音が単独で音節を成す場合は^mというように成節性を表す記号を付す。

2.2.2. 名詞クラスと名詞及び形容詞の構造について

名詞は威信方言同様に1~11, 15~18のクラスに分類できる¹²。名詞修飾要素はこの名詞クラスに応じて異なる形式をとる。

名詞修飾要素は名詞に後置される。ただし指示詞は前置も可能である。

名詞と形容詞は多くの場合 [接頭辞-語幹] と分析することができる。接頭辞の形式と名詞クラスは対応している。名詞と形容詞の接頭辞は概ね同じ形式だが、形容詞に付加される接頭辞の一部は合流しており、名詞に付加される接頭辞よりそのバリエーションは少ない。本稿では特に必要のない限りは名詞と形容詞は分析した形では提示しない。借用語は接頭辞が付加されないことがしばしばある。

2.2.3. 動詞の構造

動詞の構造は [主語接辞- (TAM 接辞) - (関係節接辞) - (目的語接辞) - [語基¹³-末母音]] と分析できる。主語接辞、関係節接辞、目的語接辞のスロットには一致する主語、先行詞、目的語の名詞クラスに応じて異なる接辞が現れる。主語接辞は多くの¹⁴動詞で必須の要素だが、主語接辞に一致する主語は必ずしも現れない。TAM接辞のスロットにはテンス・アスペクト・モダリティを示す接辞が現れる。定動詞では多くの場合このTAM接辞が現れるが、4節で後述する完了形はTAM接辞無しで主語接辞と(目的語接辞と)動詞語幹だけで形成される。[語基-末母]を動詞語幹

¹¹ この表記法は筆者が独自に用いるものである。

¹² 名詞クラスという用語はスワヒリ語及び、バントゥ諸語における一般的な用語である (中島 2000: 35-36)。本稿ではG 'gender' を名詞クラスを示すグロスとして用いる。なお1クラス、2クラスに一致する要素は3人称単数または3人称複数に一致する要素と同形である。

¹³ 語基は [語根- (派生接辞)] と分析できるが、本稿での議論には直接関連しないので詳述はしない。

¹⁴ TAM接辞-na-で動詞がマークされ主語が1人称単数の場合、主語接辞は現れない。

と呼ぶ。動詞語幹は動詞の核となる部分である。末母音は多くの場合-a だが、完了形や接続形と呼ばれる活用形では異なる。本稿では必要のない限り動詞語幹を形態素ごとに分けて提示はしない。なお借用語の動詞語幹はこの通りに形態素に分けることはできない。この動詞構造は基本的には定動詞も含むものだが、定動詞の構造については 4 節で wa コピュラの構造を説明する際に再度述べる。なお関係節接辞が付与されている場合、TAM 接辞がないこともある。この場合は過去におきた事象を示す。また関係接辞でマークされた場合、先行詞は必須ではない。

2.2.4. 語順

語順はある程度自由なようではあるが、基本語順は威信方言同様 SVO であると考えられる。コピュラ文の語順は [主語- (コピュラ) -補語] と仮定して議論を進める。つまりあえて述べない限り、コピュラ文の左側の名詞句が主語で、右側の名詞句及び形容詞句が補語である。

3. wa コピュラの分布

wa コピュラを用いた用例としては以下のようなものが挙げられる。

- (4) *mie si-li*¹⁵ *kaka* *nyi-wa* *baba*
 1SG 1SG.SM.NEG-be.NEG brother 1SG.SM-be father
 「私はお兄さんではありませんよ、おじさんですよ」
- (5) *yuno* *ka-wa* *mongo*
 this.G1 3SG.SM-be liar
 「こいつは嘘つきだ」
- (6) *Shabani* *ka-wa* *mkulima*
 Shabani 3SG.SM-be farmer
 「シャバーニは農民だ」
- (7) *kino* *chumba kikubwa* *ki-wa* *cheupe*
 this.G7 room big.G7 G7.SM-be white.G7
 「この大きな部屋はきれいだ」

¹⁵ この-li という形態素はサバキ祖語の*-li- ‘be’ (Nurse & Hinne-busch 1993: 649) に遡ると考えられ、マクンドゥチ方言において [否定主語接辞-li] という形式は wa コピュラの（補充法による）異形態として機能している。

一方でコピュラ文であっても以下のように *wa* コピュラの使用が容認されない例もある。

- (8) a. *na-yo-i-chaka* *ino*
 IMPF-G9.REL-G9.OM-want this.G9
 b. **na-yo-i-chaka* *i-wa* *ino*
 IMPF-G9.REL-G9.OM-want G9.SM-be this.G9
 「私が欲しいのはこれだ」

- (9) a. *jina* *lyangu* *Makoto*
 name my.G5 Makoto
 b. **jina* *lyangu* *li-wa* *Makoto*
 name my.G5 G5.SM-be Makoto
 「私の名前は真だ」

- (10) X: *nani* *Hassim*
 who Hassim
 「ハッシムって誰？」

- Y: a. *Hassim* *yulya* *mw-a-kaa* *kitako*
 Hassim that.G1 NMLZ-PST-sit seat
 b. **Hassim* *ka-wa* *yulya* *mw-a-kaa* *kitako*
 Hassim 3SG.SM-be that.G1 NMLZ-PST-sit seat
 「ハッシムはあの座ってるやつだ」

wa コピュラの使用の可否は英語や日本語でなされているコピュラ文の分析の枠組みを用いてマクンドゥチ方言のコピュラ文を捉えなおすと概ね明らかになる。3.1 節では英語や日本語におけるコピュラ文の分析を概説する。3.2 節ではその枠組みにマクンドゥチ方言のコピュラ文を当てはめて分析をする。そしてそのうえでその枠組みでは説明できない例外について説明を行う。

3.1. コピュラ文の分類について

Higgins (1979), Declerck (1988) は英語の、西山 (2003) は主に日本語のコピュラ文を意味構造の違いに基づいて分類、及び分析している。彼らの議論では性質や属性を表す文は叙述文¹⁶ (predicational sentences) と呼ばれる。そして叙述文と意味的に

¹⁶ 西山 (2003) は措定文という用語を用いているが、本稿では田子内・足立 (2005) や岸本 (2012) にならって叙述文と呼ぶことにする。

異なる性質をもつコピュラ文として主に議論されているのは指定文 (specificational sentences)、同定文 (identificational sentences / descriptively-identifying sentences¹⁷) と呼ばれるタイプのコピュラ文である。ここではこの3つのタイプについて概説する。

叙述文とは「主語の名詞句の指示対象の性質、属性を述べる文」と規定することができる。(11) は叙述文の例である。

(11) John is a teacher. (Declerck 1988: 55)

(11) の a teacher のような性質を表す名詞句は叙述名詞句¹⁸ (predicational NP) と呼ばれる。叙述名詞句は性質を表しており、英語、日本語の双方において、叙述文と叙述名詞句の位置に形容詞が現れる文は意味的に類似ないしは同一であることが指摘されている (Declerck 1988: 65, 西山 2003: 128-130)。

指定文は「主語が変項の働きをして補語がその変項に対して値を指定する文¹⁹」と規定することができる。(12) は指定文の例である。

(12) The one who stole the money is Fred. (Declerck 1988: 2)

(12) は主語が「X がその金を盗んだ」という変項であり補語の Fred がその X の値となっている。指定文の特徴の一つは WH-疑問文 (変項) とそれに対する答え (値) を単一の文で実現しているという点にある。

同定文はひとまず「主語の名詞句に対して同定情報を与える文」ということができる。(13) が同定文の例である。

(13) Mike? Who's Mike? — Mike is my brother. (Declerck 1988: 95)

西山 (2003: 173) は同定文について「ある表現の指示対象が「どれ」であるかは了解されているが、それが何者であるか不明である場合に、その情報を与えるタイプの文である」と述べている。(13) では Mike を聞き手はある集団から選び出しているが、何者であるかが分からないために続く文で my brother という情報が与えられている。指定文と同定文の違いは指定文がある集合²⁰から指示対象を選び出す文であるのに対して、同定文はその選び出された指示対象について聞き手が既知の (特

¹⁷ identificational sentences は Higgins (1979) の、descriptively-identifying sentences は Declerck (1988) の用語である。

¹⁸ 日本語の用語は西山 (2003: 73) による。

¹⁹ 西山 (2003) は日本語の主語が変項となり補語が値となる文を倒置指定文と呼んでいるが、本稿では単に指定文と呼ぶこととする。

²⁰ 変項 (9) の主語) はある集合が一つの項として実現されたものとみなされる。これを西山 (2003) は非指示的としているが岸本 (2012) は指示的としており、研究者間で意見の分かれる問題のようである。本稿ではこの変項の指示性については立ち入らない。

定の) 対象と結びつけられない場合に、その指示対象と特定の対象を結びつける (同定する) 文であるという点にある²¹ (Declerk 1988: 95-96)。また同定文の補語の位置には (13) の *my brother* のように叙述文の補語にもなり得る名詞句も現れる。叙述文の補語と同定文の補語の違いについては、以下の二つが挙げられる。一つは叙述文の補語は属性以上の情報を与えないのに対して、同定文の補語は主語を他から識別するのに十分な記述内容をもつという点である (西山 2003: 171²²)。もう一つは叙述文の補語が指示対象をもたない名詞句であるのに対し、同定文の補語は *deictic* な表現でいいかえることのできる世界の中の直接的対象でないにせよ、指示対象をもつものである²³ (熊本 1995: 160) という点である。

3.2. マクンドウチ方言における *wa* コピュラの使用

3.2.1. コピュラの使用が叙述文に限定されることを示す例

3 節の冒頭に挙げた例をみると *wa* コピュラが使用できる (4)-(7) は主語の指示対象 (*mie* 「私」, *yuno* 「こいつ」, *Shabani* 「シャバーニ (人名)」, *kino chumba kikubwa* 「この大きな部屋」) についてその性質や属性を表す叙述文として解釈可能なものである。それに対して *wa* コピュラが使用できない (8), (9) は主語の部分がそれぞれ 「私の名前は何か」、「私が欲しいものは何か」という WH-疑問文に置き換えることが可能な変項で、補語の部分でその変項に対する値が与えられる指定文になっている。(10) は *Hassim* 「ハッシム (人名)」という主語の指示対象を「あの座ってるやつ」という特定の対象と結びつける同定文となっている。以上から *wa* コピュラが叙述文で使用できる一方で、指定文や同定文では使用できないことが推測される。そのことは (14), (15) と (16) の対比から確認できる。

(14), (15) は名詞句を並置するだけでも、コピュラを用いても文法的である。(14) は補語が「学生」であり「あなたが昨日あった人は学生という性質を有している」という叙述文の解釈が可能である。また (15) の補語は「太っている」という形容詞であり、(15) も叙述文といえる。これに対して補語を (16) のように指示詞にす

²¹ Declerk (1988: 101) は ‘Who is NP?’ という文が指定文の疑問文であれば NP が補語、‘Who’ が基底の主語になり、同定文の疑問文であれば ‘Who’ が補語、NP は基底の主語になるとしている。以下の (i)-(iv) の例は一連のやり取りとして想定されるが (i), (ii) は指定文、(iii), (iv) は同定文になる。(i) ‘Who’s the new president?’ (ii) ‘That man over there (is the new president).’ (iii) ‘Who is he / that man?’ (iv) ‘He is the son of the former president.’

²² 西山 (2003: 171) は同定文の補語が十分な記述内容をもたなければいけないことを示す例として「あの女性はいったい何者か」という同定情報を求める問いに「あの人は背の高い女性です」が答えとならないことを挙げている。ただしどのような名詞句が「十分な記述内容」をもつかは明確には言及されていない。

²³ 中川 (2007) は叙述文の補語が存在を含意しないのに対して、同定文の補語が存在を含意すると述べている。

ると *wa* コピュラを用いた文 (16b) は容認されない。指示詞を含む直示表現は指示的名詞句としてしか用いられない (西山 2003: 61)、叙述名詞句は非指示的である (西山 2003: 73)、ということを踏まえると (16) は叙述文ではない。(14), (15) と (16) の違いは叙述文と解釈できるかという点にあり、(16) でコピュラが使用できないのは叙述文ではないためであるといえる。ちなみに (16) は *uyomona jana* 「あなたが昨日会った人」を変項とみなせば指定文、特定の指示対象をもつとみなせば同定文 (もしくは同一性文²⁴)、となる。

- (14) a. *u-yo-m-ona* *jana* *mwanaufuzi*
 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday student
 b. *u-yo-m-ona* *jana* *ka-wa* *mwanaufuzi*
 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday 3SG.SM-be student
 「あなたが昨日あった人は学生だ」
- (15) a. *u-yo-m-ona* *jana* *ṁnene*
 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday fat.G1
 b. *u-yo-m-ona* *jana* *ka-wa* *ṁnene*
 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday 3SG.SM-be fat.G1
 「あなたが昨日あった人は太っていた」
- (16) a. *u-yo-m-ona* *jana* *yuno*
 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday this.G1
 b. **u-yo-m-ona* *jana* *ka-wa* *yuno*
 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday 3SG.SM-be this.G1
 「あなたが昨日あった人はこの人だ」

(14), (15) と (16) の対比だけをみると 3.1 節で挙げたコピュラ文の分類を適用せず、単に補語の名詞句の指示性に着目するだけで *wa* コピュラの使用の可否を説明できそうだが、(17) のように補語が特定の指示対象をもたない場合でも *wa* コピュラは使用することができない。

²⁴ 主語、補語ともに指示的な文を同定文とするか同一性文とするかは研究者間で意見が分かれるようである。熊本 (1995: 157-158) は文の意味機能を重視して、直示表現など特定の対象と結びつけることでも他から識別して認定する (同定する) 文も同定文に分類している。これに対して西山 (2003: 187) は同定文と同一性文をいかに区別するかの問題があると考え、主語、補語ともに世界のなかの一次的な個体を指示する文を同定文とするかは保留している。

- (17) a. *ishara ya vua mawingu*
 sign of.G9 rain cloud
 b. **ishara ya vua i-wa mawingu*
 sign of.G9 rain G9.SM-be cloud
 「雨の兆候は雲だ」

ishara ya vua 「雨の兆候」は変項、*mawingu* 「雲」は値であり、(17) は指定文に分類される。(17) の *mawingu* 「雲」は特定の雲を指しているわけではないがコピュラの使用は容認されない。この例を踏まえると *wa* コピュラの使用の可否は単に名詞句の指示性に還元せず、コピュラ文の意味構造に基づく分類を用いて説明すべきであろう。

3.2.2. 例外について

ここまで *wa* コピュラが叙述文で使用できて、指定文、同定文では使用できないことを述べてきたが、これだけでは *wa* コピュラの分布を説明することはできない。

まず (18), (19) のように補語で主語の指示対象の本質的な属性を問う疑問詞疑問文とそれに答える文では *wa* コピュラを用いることはできない。

- (18) X: *tunda lino ø/*li-wa tunda gani*
 fruit this.G5 ø/G5.SM-be fruit what kind of
 「この果物はどんな果物ですか？」
 Y: *lino ø/*li-wa fenesi*
 this.G5 ø/SM.G5-be jack fruit
 「これはジャックフルーツ」

- (19) X: *icho ø/*ki-wa nini*
 that.G7 ø/G7.SM-be what
 「それは何？」
 Y: *icho ø/*ki-wa kiti*
 that.G7 ø/G7.SM-be chair
 「それは椅子だ」

(18), (19) のような主語の指示対象の本質的な属性を補語で示す例がどのタイプのコピュラ文に分類できるかについての十分な分析は、3.1 節に挙げた先行研究においてなされていない。Higgins (1979: 288-289) は ‘That (animal) is a kangaroo’ という文を ‘That is a teacher’ という文と対比させて ‘a kangaroo’ のような生来の本質的な性質と ‘a teacher’ のような生来のものではない文化的性質の区別が難しいとしな

からも、本質的な性質を示す語を補語にとる文は同定文に分類できる可能性があるとしている。本稿ではこのような文が叙述文であるのか、同定文であるのか、あるいは別のタイプのコピュラ文であるのかについては議論をしない。ただマクンドゥチ方言において補語の最初の要素が主語の指示対象の本質的な性質を示す語であるかどうかは、叙述文であるかどうかとは別に、*wa* コピュラの使用の可否を決める要因となっているようである。このことは (18), (19) だけでなく、(20a), (21a) が性質を表す叙述文にもかかわらず *wa* コピュラの使用が容認されないことから分かる。

- (20) a. **uno* *u-wa* *mnazi* *mrefu*
 this.G3 G3.SM-be coconut palm long. G3
 「これは高いヤシの木だ」

- b. *uno* *u-wa* *mrefu*
 this.G3 G3.SM-be long. G3
 「これ (この木) は高い」

- (21) a. **Juma* *ka-wa* *mt'u* *mrefu*
 Juma 3SG.SM-be person tall.G1
 「ジュマは背の高い人だ」

- b. *Juma* *ka-wa* *mwaliimu* *mrefu*
 Juma 3SG.SM-be teacher tall.G1
 「ジュマは背の高い先生だ」

(20a) の *mnazi* 「ココヤシの木」と (21a) の *mt'u* はどちらも主語の本質的な性質を表す語である。これらの語を (20b) のように取り除いたり、(21b) のように非本質的な性質を表す語に置き換えるとコピュラを用いることができる。また補語の最初の要素が非本質的な性質を表す語の場合は叙述文でなくても *wa* コピュラを用いることができる。

- (22) *Makoto* *ka-wa* *mwanaufuzi* *u-yo-m-ona* *jana*
 Makoto 3SG.SM-be student 2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday
 「真はあなたが昨日あった学生だ」

(22) では主語の「真」という人物を補語の「あなたが昨日会った学生」という特定の人物と結びつけている同定文であるが、*wa* コピュラを用いることができる。(18)-(22) から補語の最初の要素が非本質的な性質を表す叙述名詞である場合に *wa* コピュラを用いることができるといえる。ただ (23) のようなその種が属するカテゴリーを示す例ではコピュラの使用が容認され、何が本質的な性質であるのか、コ

ピュラの使用の可否を決める境界がどこにあるのかは更なる考察が必要である。

- (23) *kunguru* *ka-wa* *ndege*
 crow 3SG.SM-be bird
 「カラスは鳥だ」

これ以外にも例外がある。それが (24) のように名前を問う文である。

- (24) X: *weye* *ku-wa* *nani*
 2SG 2SG.SM-be who
 「あなたは誰？」
 Y: *mie* *nyi-wa* *Hidaya*
 1SG 1SG.SM-be Hidaya
 「私はヒダヤ」

西山 (2003: 126) は名前も叙述名詞句となり得るとしており、一見すると (24) は性質を問う文とその答えとなる叙述文のようにみえる。しかしながら (24) は電話の応答で用いられた例である。実際に対面してのやりとりであれば単に名前を問う文とその答えとも考えられるが、電話でのやりとりであることを考えると声の持ち主が誰であるのかを同定しようとしているとみるのが妥当であろう。なお叙述文以外ではコピュラが使えないとすると、(24) のXとYが知り合い同士の場合、Yは「私」をXの知っている「ヒダヤ」という特定の人物と結びつけようとする同定文になるためコピュラの使用が容認されないことが予想されるが、実際は知り合い同士のやりとりでもコピュラの使用は容認される²⁵。

3.2.3. 形容詞文について

3.1 節で叙述文と形容詞文に類似性があることは述べたが、(7) や (15) にも挙げた通り補語の位置に形容詞が現れる形容詞文でもコピュラは用いられる。

- (25) a. *kisu* *kino* *ki-wa* *kikali*
 knife this.G7 G7.SM-be sharp.G7
 b. *kisu* *kino* *kikali*
 knife this.G7 sharp.G7
 「このナイフは鋭い」

(25) に挙げた形容詞は形態的には名詞と同様に [接頭辞-語幹] と分析できるもの

²⁵ 名前の応答文における *wa* コピュラの使用の容認性は主語が3人称の場合、低くなる。

で、コピュラを用いなくても文法的だが、*hai*「生きている」、*wazi*²⁶「開いている」、*macho*「目覚めている」²⁷などを用いる文ではコピュラの使用は義務的である。これら 3 つは規範的²⁸には形容詞とされるが、その統語的ふるまいからは形容詞ではなく副詞として分析される。この点については 5.3 節で触れる。

- (26) a. *ng'ombe ka-wa hai*
 cow 3SG.SM-be alive
 b. **ng'ombe hai*
 cow alive
 「ウシが生きている」

3.3. 小括

本節では叙述文、指定文、同定文といった英語や日本語のコピュラ文で行われてきた分析に照らし合わせて、スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラ文での *wa* コピュラの分布を調べた。その結果 *wa* コピュラの使用は概ね叙述文に限定されるが、補語の最初の要素が主語の本質的な性質を表す場合は叙述文であっても *wa* コピュラが使用できないこと、逆に補語の最初の要素が *wa* コピュラと共起できる叙述名詞の場合は叙述文でなくても *wa* コピュラが使用できることが分かった。

4. *wa* コピュラの形態的特徴とその時間性について

wa コピュラ は形式的には動詞の完了形とみなすことができる。しかしながら、発話時以前のイベントが含意されるかという点において他の動詞の完了形とは異なるふるまいをみせる。

4.1. *wa* コピュラの完了形という形態的特徴

ここまで *wa* コピュラの形態的特徴には触れなかったが、*wa* コピュラは形態的には動詞の完了形とみなせる。以下でそれについて述べる。

完了形以外の定動詞は [主語接辞-TAM 接辞- (目的語接辞) - [語基-末母音]] と分

²⁶ ただし *wazi* については C 氏はコピュラを用いなくとも容認した。

²⁷ *hai*, *wazi*, *macho* は威信方言にもみられる語彙である。*hai* と *wazi* はアラビア語からの借用語である。*macho* には「目 (pl.)」という意味もありそこからのゼロ派生と推測される。

²⁸ Johnson (1939) 参照。

析できる。TAM 接辞には *-na-*「未完結」, *-cha-*「推量」, *-me-*「先行²⁹」, *-mena-*「起動」, *-li-*「過去否定」, *-ja-*「完了否定」がある。末母音はすべて *-a* である

(27) *ka-na-tend-a* *kazi*

3SG.SM-IMPV-do-FV work

「彼は仕事をしている」(一般的な定動詞の活用の例)

これに対して完了形は [主語接辞- (目的語接辞) - [語基-末母音]] と分析できる。TAM 接辞は伴わない。末母音のスロットは語基の最終母音が複写されることで埋められる。

(28) *ka-tend-e* (<*tenda*) *kazi*

3SG.SM-do-FV.PRF work

「彼は仕事をした」(動詞の完了形の一般的な例)

ただし動詞語幹が *-Ca* という形式の場合少なくとも見た目上は語幹の形は変化せず、[主語接辞-動詞語幹] という形式になる。

(29) *ka-ja* (<*ja*) *kale* *kweli*

3SG.SM-come.PRF long ago really

「彼はとても前に来た」(*-Ca* 語幹の動詞の完了形の例)

wa コピュラの [主語接辞-*wa*] という形式も (29) の [主語接辞-*ja*] と同じように分析でき、動詞の完了形とみなすことができる。

4.2. 動詞の完了形の機能について

動詞の完了形には大まかに言うと動詞語幹によって、①発話時以前にイベント(動作)があったことは表すがその結果状態は表さない、②発話時以前のイベント(動作)と発話時にみられるその結果状態を表す、③発話時にみられる結果状態のみ表す、という3つのパターンがある。

(30) *ka-fiki* *vano* *tangu* *saa* *sita* *hea* *ke³⁰-me-uka*
3SG.SM-arrive.PRF here since hour six but 3SG.SM-ANT-leave

「彼は12時に着いたが出て行った」(①の例)

²⁹ ここでの節タイトルの「完了」とは機能が異なる。節タイトルの完了は後述する通りイベント(動作)の終了に必ずしも主眼は置かれませんが、*-me-*は参照時以前にイベントが終了していることを示す。

³⁰ 3人称単数の主語接辞は通常 *ka-* という形態だが、TAM 接辞 *-me-* が後続する場合、*ke-* という異形態で現れる。

- (31) *unju* *Fatuma k-ende* *skuli*
morning Fatuma 3SG.SM-go.PRF school
「朝、ファトゥマは学校に行った（まだ帰宅していない）」(②の例)

- (32) *ka-vwaa* *nguo* *zuri*
3SG.SM-wear.PRF clothes good.G9
「彼は良い服を着ている」(③の例)

①②③は表している時間局面に違いはあるが、発話時以前のイベントを含意するという点では共通している³¹。

4.3. wa コピュラに発話時以前のイベントは想定されるか

ここまで *wa* コピュラが形態的に動詞の完了形であること、完了形では発話時以前のイベントが含まれることを確認した。以下では動詞語幹-*wa* の意味を確認したうえで、その完了形では発話時以前のイベントが他の動詞と同様に含意されるのかを分析する。

-*wa* には本稿の冒頭で述べた通り ‘be, become’ といった訳が与えられている (Chum 1963: 66)。*‘become’* の意味は (33) から確認することができる。

- (33) *usumba* *u-na-wa* *kamba*
coconut fibre G11.SM-IMPF-become rope
「ウスンバ（ココヤシの繊維）はロープになる」

(33) から-*wa* が状態の変化を表すということが分かる。しかしながら *wa* コピュラを用いた文では発話時以前のイベント、つまり発話時以前の状態の変化を想定することは難しい。それは以下の例から分かる。

- (34) *Asani* *ka-wa* *kaka* *angu*
Hassan 3SG.SM-be brother my.G9
「ハッサンは私の兄だ」

- (35) *mkonga* *wa* *ndovu* *u-wa* *mrefu*
trunk of.G3 elephant G3.SM-be long.G3
「象の鼻は長い」

³¹ (3) で完了形の否定形を含む例を挙げているが、否定形は肯定形と意味的に対をなしておらず、動詞にかかわらず、発話時以前のイベントが起きなかったことを含意しない。

- (36) *wajerumani* *wa-wa* *warefu*
 German people 3PL.SM-be tall.G2
 「ドイツ人（というもの）は背が高い」

- (37) a. *embe* *zi-wa* *mbichi / mbivu*
 mango G10.SM-be unripe / ripe
 b. *embe* *zi-me-wa* **mbichi / mbivu*
 mango G10.SM-ANT-be unripe / ripe
 「マンゴーは未熟だ / 熟れている」

(34) は何か特殊な文脈で得られたものではなく、過去に「兄になる」というイベントがあったとは考えにくい。(35) も象の鼻は象が生まれたときから長く「鼻が長くなる」というイベントは想定できない。(36) は学校で生徒にドイツ人の特徴を説明するという文脈を設定したうえで容認性の判断を求めており、あるドイツ人の「背が高くなる」という出来事があったとは言えない。以上から (35)-(36) の例には発話時以前の状態変化は含意されていないと考えるのが妥当である。更に (37) をみると、*wa* コピュラでは「未熟である」という状態を表しうが、TAM 接辞-*me*-と-*wa* が共起すると「熟れている」という状態は表せても、「未熟である」という状態は表せない。これは、マンゴーが「熟れる」という変化は想起できるが、「未熟になる」という変化は想起できないためであると考えられる。つまり TAM 接辞-*me*-と共起する場合は過去の変化が含意されるのに対して *wa* コピュラではそのような変化が含意されないと考えられる。以上から他の動詞³²の完了形とは異なり、*wa* コピュラはその完了形としての形式から推測される状態変化の意味は持たず、-*wa* の他の活用形とは異なる意味をもつことがうかがえる。なお-*wa* という形態素はスワヒリ語他変種にも在証され (Nurse & Hinnebusch 1993: 613)、多義であること自体は威信方言の辞書にも記述されている³³が、ある活用形でのみ特異な意味をもつことは筆者の知る限りスワヒリ語諸変種の記述においてこれまで報告されていない³⁴。

³² -*ijua* 「知る」も-*wa* と同様に完了形では過去の変化が含意されていない可能性が高いが、現段階でそう断言できる証拠は揃っていない。

³³ 威信方言では *be*, *become*, *take place*, *exist*, *occur*, *happen* などの訳が与えられている (Johnson 1939: 521)。

³⁴ Racine-Issa (2002: 110) は *wa* コピュラを「助動詞」というカテゴリーに分類して、他の動詞の活用から分けているが、多義性について特に言及はしていない。

5. wa コピュラの文法化の可能性について

2 節で wa コピュラは概ね叙述文に限定され、指定文や同定文では主語と補語が並置されるということを示したが、叙述文は wa コピュラを用いずに名詞句を並置するだけでも成立する ((1a), (14a), (15a) 参照)。つまり wa コピュラ型のコピュラ文は名詞句並置型のコピュラ文に比べてその分布が限定されている。その分布をまとめると以下ようになる。

補語	コピュラなし	wa コピュラ
名詞 (非叙述)	☑	☐
名詞 (叙述・本質)	☑	☐
名詞 (叙述・非本質)	☑	☑
形容詞	☑	☑
hai 型形容詞	☐	☑

分布の偏りは以下の対応する否定文にもみられる。

(38) a. *mie si³⁵ mwanafuzi*

1SG COP.NEG student

b. *mie si-li mwanafuzi*

1SG 1SG.SM.NEG-be.NEG student

「私は学生ではない」

(39) a. *u-yo-m-ona jana si yuno*

2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday COP.NEG this.G1

b. **u-yo-m-ona jana ha-li yuno*

2SG.SM-G1.REL-3SG.OM-see yesterday 3SG.SM.NEG-be.NEG this.G1

「あなたが昨日あった人はこの人ではない」

(38a) や (39a) の否定辞 *si* は *hai* 型形容詞文を除くすべてのコピュラ文で用いられるが、[否定主語接辞-*li*] という形式は叙述文のみで用いられる。

コピュラ文に形式的に名詞句並置型と wa コピュラ型という 2 つのタイプが存在

³⁵ この否定の形式は威信方言にもみられる。威信方言では語の後ろから 2 番目にストレスが置かれるとされ、このことを音韻語判定の基準とすると *si* は後続する語をホストとする後接語ともいわれる (Polomé 1969:50- 51)。マクンドゥチ方言のアクセント実現は威信方言と異なることは指摘されているが (Whiteley 1959: 47, Nurse & Hinnebusch 1993: 522, Racine-Issa 2002: 25-26)、これまでのところ音韻語を規定した研究はない。本稿ではこの *si* の表記はスワヒリ語の正書法にならって接語の標識を付せず分かち書きする。

し、前者がほぼすべてのコピュラ文で用いられうるのに対して、後者の分布が限定されているのはなぜだろうか。本節では *wa* コピュラが文法化の結果、叙述文でのコピュラとしての機能を獲得した可能性について論じる。文法化を仮定すると現在叙述文に二つのタイプが並立しているのは古い形式（名詞句並置型）が残存したまま、新しい形式（*wa* コピュラ型）が発達したためであると考えられる。

以下でまず、*-wa* の完了形からの文法化について検討し、その後で [主語接辞-*wa*] という形式の存在詞としての用法に着目して、そこからの文法化について考える。

5.1. 動詞の完了形が直接文法化した可能性について

ある言語変化が考えられるとき、まず第一に検討されるべきはより単純な変化である。*wa* コピュラの文法化で言えば、*-wa* の完了形が通時的変化とともにその発話時以前のイベントが想定可能な事態を含意するという完了の機能を失い、叙述文のコピュラになったと考えるべきであろう。

英語の ‘become’ には指示詞や代名詞、固有名詞は後続せず、叙述名詞句しか後続しないことが指摘されている (Higgins 1979: 241-242, Declerck 1988:90)。-*wa* にも ‘become’ と同様に叙述名詞句しか後続し得ないと仮定すると、叙述文でしか使用できないという *wa* コピュラの特性は-*wa* の特性に拠るものであると考えられる。しかし実際には (40) にみられる通り、-*wa* は「なる」という変化を表す場合でも³⁶ ‘become’ と異なり指示詞のような非叙述名詞句が後続しうる。

- (40) *ilya* *i-me-wa* *ino*
 that.G9 G9.SM-ANT-be this.G9
 「あれ（先ほどまげていたもの）はこれ（ケーキ）になった」

(40) の例を踏まえると、-*wa* の完了形から直接文法化したと考えた場合、*wa* コピュラの使用が叙述文に限定される理由は説明できない。

またそもそも完了形の機能を失う理由も不明瞭である。

以上から *wa* コピュラの叙述文でのコピュラとしての用法は、完了の機能を失って発達したと単純に考えることは難しい。

5.2. 存在詞からの文法化について

4.3 節で-*wa* が状態変化を表すことを確認したが、-*wa* はこれ以外にも存在を表す意味をもつ。以下はそのことを示す例である。

³⁶ 動詞語幹-*wa* は *ka-cha-wa ka-na-tenda kazi* (3SG.SM-PROB -be 3SG.SM-IMPF-do work) 「彼はおそらく仕事をしているだろう」という例にみられるようにそれ自体が意味をもたないこともある。

- (41) *kila wakati wa sikukuu Makoto ka-na-wa mji-ni*
 every time of.G11 holiday Makoto 3SG.SM-IMP-be town-LOC
 「(ラマダン明けの) 祝日のときはいつも真は街にいる」

- (42) *ku-me-wa kaskazi*
 2SG.SM-ANT-be north
 「もう北にいるの？」

- (43) X: *Fatuma ka-wa*
 Fatuma 3SG.SM-be
 「ファトゥマいる？」
 Y: *ka-wa=vo*
 3SG.SM-be=here
 「(ここに) いるよ」

- (44) *maji ya-wa mengi*
 water G6.SM-be many. G6
 「水がたくさんある」

-wa は (41), (42) のように TAM 接辞でマークされた場合でも、(43), (44) のように [主語接辞-wa] という wa コピュラと同じ形式であっても、存在を表すことができる。しかし TAM 接辞でマークされた場合は、その TAM 接辞に応じた含意が生じるのに対して、[主語接辞-wa] という形式の場合は、その完了形という形式 (4.1 節参照) にもかかわらず、発話時以前のある時点に移動してきたというようなイベントは想定することができない。それは (45) の例から分かる。

- (45) a. *ṁrima Kilimanjaro u-wa Tanzania*
 mountain Kilimanjaro G3.SM-be Tanzania
 b. **ṁrima Kilimanjaro u-me-wa Tanzania*
 mountain Kilimanjaro G3.SM-ANT-be Tanzania
 「キリマンジャロ山はタンザニアにある」

(45) のキリマンジャロ山は恒常的にタンザニアにあると考えるのが自然であり、移動の結果現在タンザニアにあると考えることはできない。これは-me-を用いた (45b) が容認されないことから分かる。以上から [主語接辞-wa] という要素にはその形式から予想される意味はなく、動詞の活用のパラダイムからは独立した存在詞として機能していると考えられる。

この存在詞としての機能をもつ [主語接辞-wa] という要素は言うまでもなく、形

式的には *wa* コピュラとまったく同じである。対応する否定形も (46) に示す通り *wa* コピュラの否定形と同じ [否定主語接辞-*li*] という形式である。

- (46) *Ame* *ha-li* *nyumba-ni*
 Ame 3SG.SM.NEG-be.NEG house-LOC
 「アメは家にいない」

このような形式の一致から *wa* コピュラと存在詞の間に何らかの関連を疑うのは自然であろう。以下では存在詞から *wa* コピュラへの文法化について考察する。

姿勢や場所、存在を示す述語からコピュラへの文法化は通言語的にもみられる現象である (Faverey, Johns & Wouk 1976, Devitt 1990, Hengeveld 1992, Noonan & Grunow-Hårsta 2002, 工藤 2014)。存在詞からコピュラへの文法化はスワヒリ語他変種でもみられる。

- (47) *ng'ombe* *yu-ko* *hai*³⁷
 cow 3SG.SM-EXIST alive
 「ウシは生きている」(威信方言の例³⁸)

- (48) *ng'ombe* *yu-ko* *m-zima*
 cow 3SG.SM-EXIST G1-fine
 「ウシは元気だ」(威信方言の例)

- (49) *mimi* *ni-ko* *bado* *mwanafunzi*
 1SG 1SG.SM-EXIST still student
 「私はまだ学生だ」(威信方言の例)

- (50) *chakula* *iko* *kitu* *mukubwa*
 food COP thing big
 「食べ物重要なものだ」(Lecoste 1961: 220) (シャバスワヒリ語の例)

(47)-(49) は威信方言の例である。(47) はマクンドウチ方言でコピュラが義務的な例 (26) と並行的な例である。(47) のように威信方言の存在詞が無接頭辞の借用語形容詞と共起してコピュラのようにふるまう例は中島 (2000: 130) や Marten (2013: 62) で記述されている。それに対して (48) のように接頭辞をとる形容詞と共起する例

³⁷ 威信方言の表記は正書法ではなく、本稿のマクンドウチ方言の表記法に従った。二つの表記法は概ね同じであるが、(48) のように鼻音に成節性を示す記号を付すのは正書法とは異なる。

³⁸ (47), (48), (49) の威信方言の例はザンジバル・ストーンタウン在住の 20 代男性から得られたものである。

はこれまで記述されていないようである。筆者の調査でこれ以外に *-tupu* 「空の」、*-refu* 「長い、高い」、*-kali* 「鋭い」といった形容詞と共に確認されている。(49), (50) は名詞句をとる例である。(49) のように威信方言で名詞句を存在詞に後続させる例はこの 1 例しか確認されていないが、威信方言以外では (50) に挙げたシャバスワヒリ語³⁹やケニアのピジンスワヒリ語の例 (Heine & Kuteva 2002: 99) がある。

他言語や他変種を見た場合、存在詞からコピュラへの文法化は自然な変化であるといえる。そして存在詞から文法化しているという仮定には、5.1 節で検討した完了形の機能を失って直接文法化したという仮説に比べて優れた点が二つある。

まず一つめは *wa* コピュラが形式的には完了形にもかかわらず、完了の機能をもたないということを説明できる点にある。既にみた通り存在詞も、*wa* コピュラと同様に発話時以前のイベントは含意せず、完了形の機能は保持していないといえる。*wa* コピュラが存在詞から文法化しているとする、*wa* コピュラが完了形の機能を持たないのは、存在詞の特徴を引き継いでいるためとみなすことができる。

二つめは *wa* コピュラの分布の限定性が説明できるという点にある。3 節で *wa* コピュラが概ね叙述文に限定されることを示した。通言語的にみると存在（動）詞に由来するコピュラ（的要素）は、主語の属性、性質を表す特徴をもつことがしばしばある (Verhaar 1995⁴⁰, Noonan & Grunow-Hårsta 2002⁴¹, Goddard & Harkins 2002⁴², Reid 2002⁴³)。つまり *wa* コピュラが叙述文に限定されるというのは存在詞から文法化していることを示す特徴であるといえる。

以上から *wa* コピュラは存在詞が文法化したものと考えるのが妥当であろう。

³⁹ 現在のコンゴ民主共和国カタンガ州で話されるスワヒリ語変種である。18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてもたらされ、その後ベルギーの支配下で発達（ピジン化）したとされる (Kapanga 1991: 115-124)。

⁴⁰ Verhaar (1995: 81) はトク・ピシン（パプア・ニューギニア、クレオール言語）の *stap* に場所や存在を示す用法とともに性質を示すコピュラとしての用法があると記述している。

⁴¹ Noonan & Grunow-Hårsta (2002: 88) はチャンテル語 (Chantyal ネパール、チベットビルマ語派) の場所や属性を表すコピュラ動詞 *mu* は歴史的には「座る」「留まる」といった意味をもつ動詞であったとしている。

⁴² Goddard & Harkins (2002: 229-231) はピチャンチャチャラ/ヤンクンチャチャラ語 (Pitjantjatjara / Yankunytjatjara オーストラリア、パマ・ニューガン語群) の *nyinani* 「座る」や *ngaranyi* 「立つ」が属性を表す補語と共に性徴を示すコピュラとして機能するとしている。

⁴³ Reid (2002: 246) はモイル語 (Ngan'gityemerri オーストラリア、デイリー語群) の「座る」「寝る」「立つ」「(鳥が木に) とまる」「行く」という意味を持つ動詞には存在や場所を示す用法とともに属性を示す用法があるとしている。

5.3. 文法化の道筋について

文法化の発端には (26) の *hai* をはじめとする *wa* コピュラの使用が義務的な要素を用いた叙述があったと考えられる。コピュラが義務的な要素のうち *hai* と *wazi* はアラビア語からの借用語、*macho* は「両目」を意味する名詞からのゼロ派生である。これらの要素は意味的には形容詞⁴⁴といえるかもしれないが、これらは単独で名詞を修飾できない、動詞を修飾できるという点を踏まえると形容詞ではなく副詞に分類されるべきである。

- (51) a. **ke-me-guia* *nyoka* *hai*
 3SG.SM-ANT-catch snake alive
 b. *ke-me-guia* *nyoka* *a-ye-wa* *hai*
 3SG.SM-ANT-catch snake 3SG.SM-G1.REL-be alive
 「彼は生きたヘビを捕まえた」

- (52) *nyoka* *ka-zikwa*⁴⁵ *hai*
 snake 3SG.SM-bury.PASS.PRF alive
 「ヘビは生きて埋められた」

この *hai* が副詞であるとする (26) の [主語接辞-*wa*] は存在詞で文全体の意味は「生きた状態で存在する」というような意味で解釈すべきであろう。しかしながら (26) の *hai* を意味的に副詞とみなすか形容詞とみなすかは非常に微妙な問題であることは明らかである。実際 C 氏は *hai* を用いた (26) と *mzima*「元気な」を用いた (53) は同じ意味と認識しているようである。

- (53) *ng'ombe* *ka-wa* *m-zima*
 cow 3SG.SM-be G1-healthy
 「ウンは元気だ」

(53) の *m-zima* は形態的には (15) の *m-nene*「太った」や (25) の *ki-kali*「鋭い」と同様に [接頭辞-語幹] と分析できる形容詞で、*hai* とは異なるクラスに属するといえ

⁴⁴ スワヒリ語の辞書を見る限り *hai* は一般に形容詞に分類されているといえる (Johnson 1939: 123, TUKI 2001: 95)。 *wazi* も同様である (Johnson 1939: 528, TUKI 2001: 364)。 *macho* に関しては「起きている」という意味に対して名詞、形容詞、副詞とされており (Johnson 1939: 155)、品詞分類がはっきりとしていない。

⁴⁵ 動詞語幹が受動形の場合は完了形でも動詞語幹の形は変化しない。

る⁴⁶。以上から、一つの仮説として *hai* のような意味的には形容詞的にもかわらず、統語的に副詞的ふるまいをみせる要素が借用⁴⁷などを通してマクンドゥチ方言に生まれた結果、それを叙述するために存在詞が用いられるようになり、その存在詞がコピュラとして再解釈され、意味的に類似する他の形容詞や叙述名詞句が後続するようになったということが考えられる。想定される変化は (54) の通りである。

(54) [存在詞+副詞] >> [コピュラ+形容詞] >> [コピュラ+叙述名詞句]

なお 5.2 節で威信方言における存在詞の文法化について述べた。[接頭辞-語幹] と分析できる形容詞や名詞が存在詞に後続する例は、筆者の調査では確認されたが、これまでの文法記述にはみられない。仮に [接頭辞-語幹] 型の形容詞や名詞が後続する用法が近年発達したものであるとすると、威信方言でも (54) と同様の変化が起こっていると考えられる。

ちなみに Hengeveld (1992) は類型論的立場から (54) と同様の変化を想定している。Hengeveld (1992: 240-243) はいくつかの言語⁴⁸で存在詞と副詞化された要素が共起して意味的にコピュラ文のようにふるまうこと、バスク語で存在詞は副詞化された要素とだけでなく形容詞とも共起すること、(現代標準アラビア語とは対照的に) アラビア語エジプト方言では存在詞に由来する述語が補語に名詞句をとるコピュラとして機能していることから、副詞的要素がその副詞としての機能を失い、それにとまって存在詞がコピュラへと文法化している可能性があるとしている。そしてこれに加えてイベロ・ロマンス諸語でラテン語の *stare* 「立つ」に由来する要素のコピュラへの文法化の度合いに差があること⁴⁹、スラナン語で存在詞がコピュラへと文法化する際にまず形容詞との共起がありその後名詞もあらわれるようになっていくことから、存在詞からコピュラへの文法化では形容詞叙述が先にあり、そのあとで名詞叙述がなされるようになるという筋立てを提案している (Hengeveld 1992: 245-247)。

⁴⁶ ただし *mzima* は「元気な」という意味では *hai* と同様に直接名詞を修飾することはできないようである。直接名詞を修飾する場合は「大人の」や「完全な」といった意味になるようである。

⁴⁷ *wa* コピュラが一時的に借用された語とともに用いられる例は存在する。eg.) *nguo i-wa* 'clean' (clothes G9.SM-be clean) 「服はきれいだ」

⁴⁸ Hengeveld が挙げているのはタミル語、アブハズ語 (Abkhaz)、ヒシュカリヤナ語 (Hixkaryana)、クペレ語 (Kpelle)、現代標準アラビア語、バスク語の例である。

⁴⁹ ジュデズモ (Judeo-Spanish) では場所叙述で用いられる。カタルーニャ語、スペイン語、ガリシア語ではこれに加え形容詞叙述でも用いられる。ポルトガル語では更に名詞叙述でも用いられる。

6. おわりに

本稿ではスワヒリ語マクンドゥチ方言の [主語接辞-*wa*] という形式のコピュラ、*wa* コピュラのふるまいについて論じた。3 節ではコピュラ文の意味構造や補語の意味特徴に着目して、*wa* コピュラが用いられるのは限られたタイプのコピュラ文であることを示した。4 節で *wa* コピュラの形式と含意される時間性との間にギャップがあることを示した。そのうえで 5 節では *wa* コピュラの文法化の可能性について、3 節や 4 節で挙げた *wa* コピュラの特徴と類型論的立場からの研究を照らし合わせながら検証した。そして存在詞から文法化している蓋然性が高いことが分かった。

叙述文に *wa* コピュラを用いるタイプと主語と補語を並置するタイプの二つがあることは述べたが、この二つのはっきりとした違いは不明である。*wa* コピュラ型の方は形式面だけでなく意味的にも有標で何らかの特殊な含意があるかもしれない。この問題の解明は今後の課題としたい。

略号一覧

1	first person	NEG	negative
2	second person	NMLZ	nominalizer
3	third person	OM	object marker
ANT	anterior	PASS	passive
COP	copula	pl.	plural
EXIST	existential	PL	plural
FV	final vowel	PRF	perfect
G	gender (e.g. G1=gender 1)	PROB	probability
IMPF	imperfective	REL	relative clause marker
INF	infinitive	SG	singular
LOC	locative	SM	subject marker

[付記]

本稿は筆者が、2011~2012 年度科学研究費基盤研究 (B)「東アフリカにおけるスワヒリ語諸変種の記述研究」代表: 竹村景子 (大阪大学) (研究課題番号: 23320086) の支援を受けてザンジバル・ウングウジャ島都市部にて行った調査 (2012 年 8~9 月) 及び、日本学術振興会特別研究員奨励費 (DC1) (課題番号: 25・3150) の支援を受けてザンジバル・ウングウジャ島都市部及びマクンドゥチ郡において行った調査 (2013 年 7~9 月、2014 年 2~3 月、2014 年 7~8 月) の研究成果の一部である。本稿執筆に先立ち行った 2 度の研究発表、第 54 回言語記述研究会例会「スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラ文について」(2014 年 5 月 18 日、京都大学・稲盛記念会館)、第 7 回 文法研究ワークショップ「コピュラ・存在表現」(1)「スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラ文について」(2014 年 7 月 6 日、東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所) では参加者から多くの有益なコメントを頂いた。また 2 名の査読者からも草稿の段階から多くのコメント、指摘を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

- Ashton, E. O. (1947). *Swahili Grammar (2nd. ed.)*. London: Longman.
- Chum, H. (1962 / 3). A vocabulary of the Kikae (KiMakunduchi, Kihadimu) Dialect. *Swahili* 33, 51-68.
- Declerck, R. (1988). *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Devitt, D. (1990). The diachronic development of semantics in copulas. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 16, 103-115.
- Favery, M., Johns, B., & Wouk, F. (1976). The Historical Development of Locative and Existential Copula Constructions in Afro-English Creole Languages. In S. B. Steever, C. A. Walker, & S. S. Mufwene (eds.), *Papers from the Parasession on diachronic Syntax* (pp. 88-95). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Goddard, C., & Harkins, J. (2002). Posture, location, existence, and states of being in two Central Australian languages. In J. Newman (ed.), *The Linguistics of Sitting, Standing and Lying* (pp. 213-238). Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Heine, B. & Kuteva, T. (2002). *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Higgins, F. R. (1979). *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York: Garland Publishing.
- Hengeveld, K. (1992). *Non-Verbal Predication: Theory, Typology, Diachrony*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Johnson, F. (1939). *A Standard Swahili-English Dictionary*. Nairobi: Oxford University Press.
- Kapanga, M. T. (1991). *Language variation and change: A case study of Shaba Swahili*. PhD Thesis: University of Illinois.
- Lecoste, B. (1961). A Grammatical Study of Two Recordings of Belgian Congo Swahili. *Swahili* 31, 219-226.
- Marten, L. (2013). Structure and interpretation in Swahili existential constructions. *Italian Journal of Linguistics* 25, 45-73.
- Noonan, M., & Grunow-Hårsta, K. (2002). Posture verbs in two Tibeto-Burman languages of Nepal. In J. Newman (ed.), *The Linguistics of Sitting, Standing and Lying* (pp. 79-101). Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Nurse, D. (1982). A tentative classification of the primary dialects of Swahili. *Sprache und Geschichte in Afrika* 4, 165-206.

- Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A Linguistic History*. Berkeley: University of California Press.
- Perrot, D. V. (1957). *Teach Yourself Swahili 3rd edition*. Bungay: English Universities Press.
- Polomé, E. C. (1967). *Swahili Language Handbook*. Washington, DC: Center for Applied Linguistics.
- Racine-Issa, O. (2002). *Description du kikaë: parler swahili du sud de Zanzibar : suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters Publishers.
- Reid, N. (2002). Sit right down the back. In J. Newman (ed.), *The Linguistics of Sitting, Standing and Lying* (pp. 239-267). Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili. (TUKI). (2001). *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza*. Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili (TUKI).
- Verhaar, J. W. (1995). *Toward a Reference Grammar of Tok Pisin: An Experiment in Corpus Linguistics*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Whiteley, W. H. (1959). An introduction to the rural dialects of Zanzibar, part1. *Swahili* 30, 41-69.
- (1969). *Swahili: The Rise of the National Language*. London: Methuen.
- 岸本秀樹 (2012) 「日本語コピュラ文の意味と構造」 影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』 (pp. 39-67). 東京: くろしお出版.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アспект論』 東京: ひつじ書房.
- 熊本千明 (1995) 「同定文の諸特徴」 『佐賀大学教養部研究紀要』 27, 147-164.
- 田子内健介・足立公也 (2002) 『右方移動と焦点化』 東京: 研究社.
- 中川奈津子 (2007) 「メンタル・スペース理論における措定文と記述的同定文」 『日本語用論学会大会論文集』 3, 383-386.
- 中島久 (2000) 『スワヒリ語文法』 東京: 大学書林
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 東京: ひつじ書房.

On the copula [Subject Marker-*wa*] in the Kimakunduchi (Kikae) dialect of Swahili

Makoto Furumoto

Abstract

The Kimakunduchi (Kikae) dialect is a regional variety of Swahili spoken in the southern part of Unguja, the largest island of the Zanzibar archipelago. There is a copula [Subject Marker-*wa*] in this dialect. This copulative element is used in neither Standard Swahili nor the Kiunguja dialect, which are regarded as prestigious dialects of Swahili. In this paper, I discuss the following three topics regarding this copulative element.

1. The use of the [Subject Marker-*wa*] copula is mostly restricted to ‘predicational sentences’.
2. The form [Subject Marker-*wa*] is analyzed as a ‘Perfect’ verb form, but differs from the ‘Perfect’ of other verbs in temporality.
3. It is highly probable that [Subject Marker-*wa*] is a grammaticalized existential verb.

受領日 2014年9月24日
受理日 2014年12月12日